



里見八犬傳

第五輯

卷五



3411
19
24

女編六巻之内

五

松茸院

松茸

南總里見八犬傳第五輯卷之五

東都 曲亭主人編次

第四十七回

莊助三之び道節を試せ
雙玉交其主に還ふ

單節ハ四鼓の左側を還らぬ坊を迎へんとく。と精悍く蕉火をゆり照しつ
走り歩を音音ハ恍忙呼ぶ。とや侯人甲夜を。とあを。と遣り難に
今さ邁るとぬある。とや吾侪を邁くべし駐り。と声高。と戸口立
招けども天結陰り。と路暗く其処とも判を松の火も忽地を。と母屋へ退れ。と
頻に歎息を。と悵然として立在。とや。と母屋へ退れ。と母屋へ退れ。と母屋へ退れ。と
左に右宵の安。とや。と山。と落著。と去歲の秋。と蘭盆
あり道策。とや。と戦。と子共。と苦提。と田文の



縁頼の刈草の籠引の折る荒芽の山下風窓より颯と吹入れて燈火赤とわ
 滅しう莊助を迷惑して燂兒とあると搔撈れども今来しは案内を知らぬ
 欲する物も小當らぐを茶碗を巻倒し又紡車は跌くのほろく困り果れ又
 地坑の縁を拊廻し火筋を取て搔起せ當むり此埋火刈草野を被せ顔
 さ入れて只管小焼著人とをれども未枯の草より吹けども吹けども早火燃え
 あり頻に焦燥随は火吹管のあびやとく内懲むる探れどもあもその所に當
 りびせん火蓋と闇室よむを又た呆れてをりさ傍程は犬山道節忠與甲察
 田文の地蔵の茂林を両箇の癖者前後ありしが携る仇人の首級を奪ひ
 どうんを挑し時あつて發する石火の光火道の術と退却避し敵を怖れ
 大事の前より小事ごとく思ひ入して戦ひて好むふありたりその野干玉の闇より
 解慌に打られれば彼若人が肩より落せしもの両箇の袂包のれ彼よく相似るを
 取違へを終よぬあびやとく又携る只今宿所へ切り来りしをい闇音音
 在らばやどを燈火をうめ滅し鬼の單節と呼立れども絶く回答をせぬ
 喧嘩あつて進み入る案内知る白屋の闇に迷つて徐々と家窟の邊の破戸棚(両箇の
 包を投納れし戸を引開くが所)我通秋音音々々と呼ひも地坑の前面は搔撈坐して
 彼此探求する燂箱を取んとあり又莊助の道節がわたり来りてわらわら
 する世の人心の正直のを此寡く奸悪の徒よりありあつたの老女が眞実しげに吾を
 慰しとく遊遊を今やあふ猜れればこの白屋の盜賊の宿ありあつたん
 甲夜は彼茂林の塚を祭り癖者ホが栖家も必あつたべにわれば曩は借平が
 云云といひなんも亦一向は信くし幾その言小偽かくとも都も鄙も一郷も同名の長
 うればあの音音の借平が由縁のゆふあつたて賊の妻子ゆをあつたり果してあつた
 それを謀りく外はわらわら同類は報知して斬く害せんともあつた庶莫鳥合の山賊の

取違へを終よぬあびやとく又携る只今宿所へ切り来りしをい闇音音
 在らばやどを燈火をうめ滅し鬼の單節と呼立れども絶く回答をせぬ
 喧嘩あつて進み入る案内知る白屋の闇に迷つて徐々と家窟の邊の破戸棚(両箇の
 包を投納れし戸を引開くが所)我通秋音音々々と呼ひも地坑の前面は搔撈坐して
 彼此探求する燂箱を取んとあり又莊助の道節がわたり来りてわらわら
 する世の人心の正直のを此寡く奸悪の徒よりありあつたの老女が眞実しげに吾を
 慰しとく遊遊を今やあふ猜れればこの白屋の盜賊の宿ありあつたん
 甲夜は彼茂林の塚を祭り癖者ホが栖家も必あつたべにわれば曩は借平が
 云云といひなんも亦一向は信くし幾その言小偽かくとも都も鄙も一郷も同名の長
 うればあの音音の借平が由縁のゆふあつたて賊の妻子ゆをあつたり果してあつた
 それを謀りく外はわらわら同類は報知して斬く害せんともあつた庶莫鳥合の山賊の

外面は集やともつてむらむらせんと送りゆく引くも塵やとくもんと忽地腹を尋
 思をいひ此も動くも舊の俣もを又たけ息もせむの時も道節の間近人の在る
 あらねば燧箱を索るも終は探りぬき久地炕の縁を搔拊く火筋を取て灰に
 推立彼此頭は擡起し埋火の嚮は莊助がうも被せり川草はあつてつり根り
 再び颯と吹入る鋭銳に夜風ふさふさの響く忽地燈と燃揚る火光もたぬ面を對
 して驚く道節詔を莊助齊く刀を搔取て等しく璫を突立ぬ左を右を加
 疾視する互の身構芳らば優る地炕の中は足場を揃りて且く透を窺ひて
 道節苛急く撃んと進む大刀を抜き莊助もやうを被く早をぬか犬山生と
 呼れて道節あらをぬぎこれを識る汝は誰と問へば莊助莞尔と笑ふこれを
 和殿と過世ある犬川莊助義任を告げり夕の暮るも且その刀を退かぬといは
 道節詔げふとえんがうらむ領なく刃を輕に納めともいふ此も由りせば

名告を交すもこれ亦聊おほえぬふあひぬ六月十九日その日も最夜中比
 圓塚山の邊ゆくといは莊助膝立ち節婦濱路を火葬の愁歎が竊
 聞しを知らざりけん彼村雨の大刀をぬき君の讎言を謀らんと立去らんと
 程小刀の璫握留る名告被つとの太刀を句取らんとするを振拂ひ丁と懸
 たる刃の光り小句こも透さば技合する句互の修煉虚々実々句一上二下と
 砍結ぶ刀尖餘り腕へ句受へ浅瘡吹句砍込む肩尖句あつて瘡を劈れ
 ころ句その瘡口あり飛散る小玉不思議はまがふ入りか護身囊の切延て
 雨ふかかるる刃の鞘小句心もつとぞか終は切引断る後には知る囊の中は
 一顆の玉は鮮々と頭れらる忠義の義の字句との身の中より知る玉は自
 然と見ゆる忠義の忠の字句とのあつては雙言あつて仇有繫千金の身
 を惜め火道の術小句迹を埋め往方をあつて本意あかりし今宵の再



音立目

天川莊助

英泉画

八代傳五郎長五

六

山清堂藏



枯草かのつ
ゆえ
うら燃と山
せがせし
川愕然と

天山道節

八代傳五郎長五

山清堂藏

會 田文の茂林ゆくも祈念の妨せしは汝も彼舊塚を祭りの
 原来道節和主あり一状句をの折間より入る推隔し何れを句を
 心憎れ汝が骨法武藝勇力九庸をば送小秘密を説明し合體同
 契を結ぶ萬卒を獲るもあて憑りかえれども汝とこれを宿縁なし
 況過世をあるやあんや然るを過世のありと信し一切信し一妖言を
 期を延く油断を撃んと謀るや何れを術に乗る死やいと詰る辭も
 果ぬ間よ川草はもあざりなく燃盡し又さう小黒白もさうだり一六莊助を
 此彼の玉のまわらぬ和殿の身小恙あり形牡丹花の似かふ是則和殿と
 當小異姓の兄弟とて第一の証しあつ燈燭をとてせば道節の身の中
 之知れく半信半疑の惑ひの鳥夜中も心當る地炕の縁小一裂の燂見ありと
 既中火の燃え尽るを採取りの處行く行燈小火を移し又ある
 音音ハ竊るありあざり去来不定の旅客ある莊助小苗守を仕く田文の地蔵の
 茂林のくく三町赴ちて身は單節かたる秋とて且く途小立在ぬも前面あり
 来る續松の火光ハ絶くるえざりたる素より物を買ん為し物さるふあざれば
 其処あり躰くたり来り諸折戸の邊あり裡面のやを窺ふ道節と莊助が同答
 灰小袋え一六驚あざり左右をく入り歩を竊り近づく縁頬のあざりたる柴垣小
 火をらんくする莊助やを膝を進めく喃犬山ぬ和殿果しく身の中牡丹は似る恙
 あざり過世の兄弟あり悪しめあざりつと再問へ道節ハ頭を傾け眉を擡て
 怪しむるをいふと知られん生れあざり左の肩に瘤あり六歳の

之知れく半信半疑の惑ひの鳥夜中も心當る地炕の縁小一裂の燂見ありと
 既中火の燃え尽るを採取りの處行く行燈小火を移し又ある
 音音ハ竊るありあざり去来不定の旅客ある莊助小苗守を仕く田文の地蔵の
 茂林のくく三町赴ちて身は單節かたる秋とて且く途小立在ぬも前面あり
 来る續松の火光ハ絶くるえざりたる素より物を買ん為し物さるふあざれば
 其処あり躰くたり来り諸折戸の邊あり裡面のやを窺ふ道節と莊助が同答
 灰小袋え一六驚あざり左右をく入り歩を竊り近づく縁頬のあざりたる柴垣小
 火をらんくする莊助やを膝を進めく喃犬山ぬ和殿果しく身の中牡丹は似る恙
 あざり過世の兄弟あり悪しめあざりつと再問へ道節ハ頭を傾け眉を擡て
 怪しむるをいふと知られん生れあざり左の肩に瘤あり六歳の

此故ありて一旦横死ありて不思議小蘇生せし頃より瘤の上の痣の如き形
 牡丹の花の似たりかく夥の年を歴くいぬ月十九日圓塚山の四より和主の瘤を
 破れしと聊もその痛楚を覚え次の日肩を拊るる小瘤の愈て又瘡の迹不
 絶るるをより原來そのとれを瘡口ありたる玉のあふを不思議といふ餘りあり
 此れともそのゆゑに何の故なき痣を以て過世ありたりやん因縁甚麼と
 疑問へは莊助莞尔とち笑く千萬言を費はとも證をれば空語あり疑くは
 これをえたりといひけし諸肩祖だく背向ありて背の痣を示さず道節の
 處に引燈を引くつゝの如くもえれば莊助も亦痣ありてこの身性のゆゑあり右の
 脚の下に至りて形牡丹の花の似たり豫て鏡に照して見るに痣小く異なりは
 忠も大息つて奇なり奇なりと嘆息を當下莊助祖を歛む衣領の縫合を藏むる
 忠字跡の玉を取てこれに和殿の肩の瘡口ありたる物あり又某が秘藏の玉に

護身身囊もろ共ふかの折和殿に獲られし文字を異なれしと相似たり
 てどあらんやえとて速とをふかぬ道節これを受納し受納し腕に引燈の灯を
 とりかへて感嘆の如く浅く玉をお腰著る印籠の中納めて項に掛ける
 莊助が護身身囊を返しての如く囊にこれの囊を披け世に未曾有の玉を
 又臍帯を包紙和殿の乳名誕生日及その玉を感得の緯の趣云々と書つけあり
 一たびあち必庸人かろど再會の日のあらん歎としてとが皮膚著るれども奇持の
 べり一切ひけりけりし小玉を瘡口ありたる玉と懸さこれ彼相似れば宿因ありと
 らび只その故をあるざるの己が痣のこれありとて左の衣領を推故へく肩を頭し示に
 られは莊助の欣然と護身身囊を受納め道節が痣をうらふ豫ての推量二点違ひ
 ありを怡悦の膝うち鼓く和殿これの痣ありし圓塚山今妹小告めひしを
 竊はく粗あるとせぬれども今面りこれをえ宿因空しくざるを了解せり原ふ

この玉とれ人作の物なり近世安房の里見の息女伏姫と云へり傳稀の烈女之被姫
 幼舞なりと云云の事あり役行者の示現ありこの感得の珠數の除教の玉と
 とよかくて長祿二年の秋伏姫富山小自殺の折その除教の八の玉の一道の白氣と共に八
 方へ散乱せし近曾同因の両三友下總の行徳と里見の舊臣金碗入道、大坊
 密使登崎十一郎ホハ避年くその来歴を定ふ知まりかれこれ自他の玉ハ伏姫
 臨終の誓ひありその氣と共に散乱く吾黨と共侶ハ又人間に出現する伏件の
 玉ハ仁義礼智忠信孝悌の文字をもちてありと云ふこれをもて因縁ハ
 灼然たるを知る足れり又吾黨の身の中ハ牡丹に似る悪ありハ八房の犬の毛色ハ
 類りしめぬべし彼八房の犬の毛ハ箇様々々との果略をたし示して又ハ因縁
 かくのどくわれがれ等し此悪ありとの相似る玉をも藏棄せしめ八名あり
 和殿を如く六名の既ハ相あはをぬる選る三名も遠くはる負ハ赤人ト類を

推して知る見の抑和殿と云ふ外ハ同因果の豪傑ハ武藏國大塚の令氏
 大塚信乃成孝この和殿の令妹濱路節婦が結髪の郎めり孝字號あり
 玉をもちり次ハ下總許我の浪人犬飼現八郎信道この信字號の玉をもちり
 次ハ行徳ある市人の子大田小文吾悌頼こを悌字號の玉をもちり次ハ市川
 里入山林房ハ狐ある大江親兵衛仁こを仁字號の玉をもちりかのくの
 悪ありと所トを異われどもその形ハ相同ト云ふを推して推して推して推して
 母もこの同トかたはとも過世の兄弟あり各々自然ハ犬をもち苗字ハ
 せ秋奇と云ふよもかたは多々彼姫人を吾黨の過世の母ト祭るも
 其を誣らうと云ふハ同因の八士具足共侶ハ安房へ参りて里見殿ハ
 仕まつるこれ其の原ハ返るの義ありかまて因果浅くねども宿業の係
 所致薄命なりぬめも今もかのく安堵せされハ大塚成孝ハ伯母夫

婦謀られし村雨の天刀を喪ひてを知らざりて許我へ事りてあひひ子死罪なる
 之の折天飼信道と組撃し船を陥りし行徳小漂泊七犬田父子を扶らし
 且山林房夫婦が身を殺してやをく小再度の危窮を釋ゆ其父彼夜
 さうあつても主の讐言を當座一人數番やを讐言の奸黨に誣られて既子死刑に
 臨み折天塚大飼犬田の三雄法場を却一奸黨を撃果して其を極ひ共
 侶小走す程に戸田河の舟より追ひの城兵に追詰られ渡りし死を極め小
 神宮の猪平といへる漁夫の扶助ありて船を獲て敵を避りし只彼猪平の
 そが親族ある兩個の俠客力二尺八と呼ぶもの蘆荻の中より頭れぬ奮戦突
 戦花々々力二郎水の中より追ひの天将丁田町進を撃つる尺八を前面の岸より渡
 らんとせ敵を柱く頻り小挑戦あり吾黨遂これを見再び前面へ返り渡
 して相助けんとして船を招く小猪平一切うけ引出豫てあり世をなげけん船を論めて

身共侶入水して亡にたりこれあり某亦いあつて其処を立去り折折々黄昏が
 彼両俠者が存亡を定たんと果さずも形ありあつたゆへに夜路を求め走りつと
 告るを音音の竊盗多く且驚れ且怪し舊夫の猪平ぬ甲夜小平くも門は立あひハ
 究竟かんと知らざりしれあつて拒て雲時も容さうし神をぬ身を悔えを
 心を子共の存亡心も何とせん悲れんと声立泣ぬどいとも落涙恥て
 今さう小裡面に入るも入りあつてあつ隔の柴垣は携りしむら伏沈む裡面は道節
 餘念なく緋の趣つらうとちあつて狼を改め現未曾有の奇談なり縦宿因かとい
 ともいれ稀世の豪傑ある其眼力明かぬ村雨の天刀を返さぬと和殿と讐言
 敵の多ひをせや回つて彼猪平の父小舊く仕りしあつて當時の姓名を焚雪
 世四郎といひしとを渠いよ生れ比如此々々の追退けのあつたが面影
 認めし神宮河原小さるものあつたをなげ笑つた又この家のあつた音音ハ昔

あつは且戦ひ且走るとも黄昏の折もく前面より来る旅人の間小介と立約し頗る走
 るく見かへし追事敵のわたりて造りて其の声を待た彼竹叢の邊を烈に戦ひあつ
 どのまゝに敵の
 知し當下某の如く敵八件の行客を助大刀と認る捕筆之撃かかん輝の危
 きうれらうり。のさ
 窮を彼小賣く脱れ去らん本意を人殺し身を利用せり。寧ろ共侶死かんと
 次中れは遠く舊の処へ走りぬるの竊の竹叢の入りと兼波を揚箭を射被け
 謀りて敵を驚く暗れ和殿を極ひぬる程は敵の退死日暮れて舊の列幕の
 四より起はるるを人投捨る速安が首級を揚て包と腰に附る打つる。父の仇
 父の仇龍門三宝平を撃捕く首級をも腰に著敵の伏兵両三人を漏れ撃
 果し田文の地藏堂の邊に今茲四月十二日と君七父の為に音音が建方率都
 婆あれ仇人の首級を贈贈んとて彼茂林に立寄りし小忽地和殿は驚き祭りの
 果ぞ兩級之首を又携くかす下めて輝の趣を告ぐとひし音音が在りて再び

和殿の驚きされ義勇稀なる五犬士の来歴を聞くの事かば某もその人。とて死宿
 因ぞ了解せしむればこれかおとめ。あつはの事と豫てあり夢中も知るとわらふ圓
 塚山ゆくこの村雨を和殿の途とへりし小離言を謀る究竟物を獲るうこのと
 多々女弟濱路が云云といひ末期の所望を許さば且も犬塚生を苦やく悔
 けれあるれども犬川ぬ某が彼夜に女弟の仇人を撃つはは大刀の往方も知りか
 りん小不思議なる事入りし宿因の致を所吹離合得失定は時あり夫士の隊の
 今ぞ入るが犬塚へ牽出物この大刀を何あらん。識る。時あり四犬士某の
 代り大敵と突戦し某の又四彦の爲に途を返し合ひて殺の敵を撃退ける進退
 謀り合せし如く俱に危窮を脱れ自然小協小同氣の感応鳴呼奇なる妙なりと
 既往報る長譚は莊助も亦感嘆して某もあつは又唯けの値偶の事かば某も
 和殿と某との争か玉を相換く玉のり。利あり某の犬塚を彼奸黨に誣

ぞろぞろとわづらひせんとて又莊助も共侶小愿を二樹の蔭に憩ふ。一河の流を
 渡りし縁ありぬ。俱に況宿因浅くぬ。犬士の影と形の如く途に不測の事
 ありとも相資けし無異を計りし方自よあり妻れとをを音音かへて憑りぬ。松
 犬川ぬかまの和子のうを委ひまると他もぬ誠心の現主ありひ松明をのせ
 る。あまの道節頭を揮く否燈火を携て六歌の目標ありぬ。兎も夜下を
 まはれと莊助もつれを音音の雲時目送り折戸引圖裡面に入る心
 ひの不疑ひを解くものぬ。物ぬの身は單節が飯ぬ。彼松原の戦か不邁あり走り
 後れ流箭不疲を負やう。欲き冷馬を喪ひ汝雜兵不亂妨せし。北還東路の
 あり。秋か運地何の方あり。平事ありぬ。心かさへは。この二箇の子共
 戸田河之彼大敵を殺拂ひ汝不就て悔ぬ。世に知らぬと強顔く邁
 せ。稽平ぬ。健氣あり。最期を家廟より燈進。南を阿弥陀佛と念ひぬ。

身を起こえとびわたり。外面は咳れと挑燈片は推む。折戸扱と庭門あり。燒れ々々と
 呼びて来ぬ人を誰ぞと。先平は莊役根五平。樵夫丁六。顯介をば。縁頼も
 進。近つて燒れ。夜深なるも。草木も定る夜を祀と走り
 廻る。別義あり。白井の城あり。火急のむ。下知等。當下根五平。恭しく件の状を
 下知状をとり。六顯介の。挑燈を。當下根五平。恭しく件の状を
 ら。先煉馬倍盛が。残黨あり。犬山道節忠與とのあり。竊ひ。蟻の斧成
 舉ぐ。逆謀を逞く。蚊蚋山を負ひ。力を。怨を報んと稱を。巨田新六郎。逆
 密証を奉り。今日追捕せむ。とも窮前還る。猫を。逃して。往方を知。賊
 享年二十三。骨體高く。色白く。月額の迹。延う。猶か。如。速に。報稟せよ。
 搦捕。進らせ。賞祿。宜功。依る。猶同。惡の。四五人。あり。姓名。詳。知。だ
 知る。あ。告訴。せよ。舍藏。措。同。罪。巨田。助。友。等。奉。と。声。高。う。讀。果。又



八代傳五轉卷五

十七

八代傳五轉卷五



秋の野の
虫中を悠り
志門は女の
印々々々
おひあらん
ほこおま

八代傳五轉卷五

八代傳五轉卷五

水莖みづかきの残のこりの雪ゆきと書かせん。引ひと訝うひ連つれ八重やえ律りつ宿しゆくの檐えん下した近ちかつたり。うう程ほど不ふ
 曳ひひひく病やま疲つかれ行ゆ客きやく二ふた人にんを合あ鞍あ小こ来きししる馬うまを牽ひおおははる單ひとよ節ふしののとと
 行ゆ筈はし筈はしの兩ふた箇かたを二ふた荷せ負おふ右みぎのの小こ焦あせ火かをゆゆ輝あけ先ま進まええ遠とほく
 鳴な子こ瓦わ落おれれく諸もろ打うちを左ひだりのの小こ阿あ姑こ御ご目め今いま炊かきかを伴ともふふ
 還かへりりゆゆ曳ひひひくくももよよかかいいのの睡ねららををのの吹ふききとと呼よびびああらら姉あね妹いもうとがが筈はしを
 縁えん頬ほ小こ解と卸ろちち馬うまを檐えん下したのの牽ひ居ゐれれハハ音おと音おとハハ慌あわ忙あわだだくく開あくく障せま子このの外と面めへへ行ゆ
 燈あかり推お向むけけ出で迎むかへへるる氣け色しきはは頭あたまれれくくどどかかくく遅おそくく一いつ恙あやももななららずず
 寝ねささももののこころろ睡ねのの心こころ死しにに疲つかれれももああららずずをを怪あやまませせんんかかのの心こころ死しののこころろ
 足あしをを濯あららわわせせとといいひひけけとと又また遠とほくく庖あづま福ふくよよののゆゆゆゆ准あ備らのの温ぬ湯ゆをを小こ桶か汲ひとり
 引ひ提ひぐぐ縁えん頬ほへへももとと来きるる盥あみみ小こ桶か一いつつつ程ほど小こ曳ひひひくく單ひとよ節ふしハハ彼か兩ふた箇かたのの行ゆ客きやくを
 馬うまよりより下くだりりととああららずず足あしをを濯あららわわせせくく馬うま下くだりりとと洗あららわわせせくく厩うま小こ牽ひ入いるる草くさ鞋あははれれ解と卸ろ同どう胞ほうのの

送くわ代だい小こ足あしのの汚よごれれをを洗あららわわせせ流ながままをを俟まちたたるる音おと音おとハハ件くだのの行ゆ客きやくホホがが外と面め向むてて縁えん頬ほ小こ
 尻しりちち掛かけけ背せ姿すがたををととんんかかららたたつつ訝うひひ小こ曳ひひひくく背せをを爪つめ敲たたくくとと彼か何なに処ところのの人ひともも
 ややんん尻しり馬うまをを貸かささるる彼か行ゆ客きやくわわらら白しろ井いよりより嚴げんめめるる見み下くだ知しありり左ひだり右みぎをを曲まめめ
 かかららるるゆゆとといいふふ今いまゆゆ道みち節ふしがが四よ犬いぬ士しををぬぬくくゆゆ来きるる絆はのの妨さげげととああららわわるる
 ゆゆどどああららぬぬ曳ひひひくくのの回まわりり後あと方かたををええるる真ま夜よ中ちゆう過ありり行ゆ客きやく連つれれ馬うまをを貸かささるる伴ともひひ
 信しんじじんんをを訝うひひくくとといいひひめめめめけけ小こ睡ね昏こ白しろ井いのの殿との定さ正まのの帰かへ城じやうのの途みち也なり不ふ慮りよのの
 騷そう動どう情じやう由ゆハハ定さくくふふゆゆめめもも猛まう軍ぐん兵へいううちちああららははるる何なにのの里さと由ゆ人ひと碎くだりり打うちくく
 かかへへるる小こ路みちをを去さららせせ馬うまハハ駭おそれれ人ひとのの壓おさせせれれととええんんももああららぬぬ折をりり彼か兩ふた箇かたのの行ゆ客きやく連つれれ
 ままるる後あとよりより来きるるゆゆ絆はのの難なん義ぎををええるるゆゆとといいひひめめめめ意い痛いたみみおおははれれ女に馬うま士し五ご人にんがが後あと小こ
 跟つぎぎままるるゆゆ絆はのの先さき小こ立たつつ稠ちゆう人にんをを推お分ぶん撥は遣ちりり辛からくく路みちをを引ひくく
 かかららるる小こ路みちのの里さとをを邁あだだめめとといいふふ先さきのの路みち去さららせせたたらられれもも彼か二ふたががのの小こ

憑しく精悍く扶掖せらるる一庇ありて恙なく田文の茂林のわがるる曠野
 表を走ると死多ひ子か行客達の等々舊病發りてと草打敷く共侶不枕を
 並べぬひさぶら驚くもの樹も靡りて人の微りせざるも馬も恙なくあまや
 未と難るるも小資けのれら庇を仇小入をば二入も病臥のををが終ま
 捐て去んはさびたて馬を樹の下に繫ぎわら守るものと茶の一人煙遠野小
 立ちあまも夜を深を程小家路のくあり蕉火をそと稍近つてを何人あつんと
 見れば妹がさあくとさつて迎よまつて送小呼つ呼つけられ其処は集合忽染
 力つるまで慰ゆる事の趣云云と告て共侶小勦りあつた彼二がの舊病を聊
 瘥りぬどもさうと長途を走りかたり願ふ馬さう乗してをこの宿所小俱
 めに今宵をさまく明まで只顧この錢を頼むのとされとそれさう推辞に
 よねい霎時妹と商量つ合鞍のく二を乗して還り一事の趣告る小暇

あつとさあちゆぐく必をせんといハ單節も共侶小なり益小白井あり
 下知のわとも途の難義を拯れ被入々をのりさうも措てさ還りては獨行と
 いふもや曉る程もぬ夜も何さ苦かた怨と情由をさる執成て有繫小
 中遣りかひ受る恩の重荷をさ負を敢りあろの誠を理りかたをさひだ
 音音いと胸苦しの頭を傾け嗟嘆とさう竊小尋思をさる小被行客小が
 二入も齊一病病の發りてと思ひが馬を合鞍小借りて宿を投り入所以ありぬ
 ぶなやわん尙さう人の又和子の潜びてあふをさるさうも竊小告訴せあわと
 事の虚実を探らん為小城さう兩個の間者を行客のさ云云と謀らるやわ
 ぶら然るを今愁小強顔のめく中遣りか彼小のいゆ疑めく戸由立庭小伏せとわ
 且宿貸く後ゆをせんさあわとあひくとさうも不領ありあふ推辞かさうり
 行客をさるゆとと莊役の拘傳へ自井のえ下知かこれども恩ある人の格別かん

天の明ももて想一也客人達もまれば同胞の物欲かまぬ馬ふも草を飼ふ
 ころ秋と向かき身もいづれ割龍を運く披短小途まの艱難苦勞であら
 瘡を治り宿るはいそる物の心かた馬の野中繫た時あや草を食せば死
 妹をかくしつゝと問れ七單節の頭をち掉り身も不飢ぬぬもつゝ夕夕餐
 たんぞせり幾遍著を把持らんやと回答を傾け洗足の水を推流せ音音
 母屋より散る草桶草籠片より然らば兩個の行客達よまねて入り休ひ也と
 心執継ぐ同胞の行客ホホウも對ひて聊障事とのあそ姑の兼りたり心
 ぞくゆりも既もその釋れが苗めあめをいれたりも随の白屋れども
 其処小在るあまのわん母屋よかへ曉もも又保養あふといふ慰を誘ひ
 件の兩人えりてとて款のわん情誼人の為を途の難義を假初に採れ
 一と正首小款待の心標も有るくと愛さし考ふ造作は預え許し人と

共信小や多く小身を起し引れて躰も母屋の窓の下小並びくを當下音音の
 行燈の火光小就く行客ホホウも面を對たる老眼れども定まる膝一げ小
 膝を進めてそ力二郎款尺八さるもさひひげきとわうり小叫けられて兩人驚死
 みるらち向う齊一膝をうち敷くも浅まや宿のあつち母刀自分でさるは
 外面小在りて死物宣ひを空に大く苦勞を多故也おん声の頃ひひ不
 孤燈の光細くして彼処を届る親もまきを知らうもさく外をさくひひ不故ぞ
 許さあう。下をわうらち絶て見参小今ぬ間小頭小真白ふらうのひひ艱苦
 三七と今も小推量りされは痛あくをさされ時め命あて急死面影をんなる
 鉄の六比ん小物ひもと辞ひく慰め齊一月皮を煮ては音音然るも
 歡ふ小曾えり涙をせさうけ側空も鬼もと單節ハツち野天をもさうり
 羞て有懸小名告もあつ曾の三頭小駭かれておん顔をち挿ふ袖より餘る

稱く嘆賞をりいふ尺八も亦感嘆して夫婦面を忘る迄短地契を仇せし
 艱苦の中良人代りて老る親をけり安んずる養ひをせりてん身同
 胞の心襟を知らず天縁の疏とていとも絶えとてやとて圖るる再會の
 夫婦の誠心空にけり神の導きぬらん寔に愛しりと慰められ姉妹の面を起し
 心地の思ひぬ地獄に柴折焼く茶を煖めく羞れが單節の縁頼小措りる行考
 菟を引提き窓のほろ小縁の管待大くわたりぬ彼をんこれをしりる
 音音ののり完やふ兩個の子共より對ひて曩の途でお刃達が暴病著の葎
 してやる候よ言小紛れとて容膝を向たり死今の心地のつらき茶を用ひたりと
 又兄弟共侶の否々さささささささ某ホハ身の中聊金瘡のゆひを感て長途を
 急げぬ風を凜る故の急い疾俄頃痛くわらぬ母御の對面を對面を對面を
 茶とあり痛楚の去く快と辞ひてく答る音音のつらき領地を去

歳の戦ひ不受る舊瘡の復り秋然らぬ近属戸田河原の敵を禦せ禁め
 と死痕を負ゆる秋心とて譬は些のなかり瘡でも破傷風はあつた死のつら
 くのめどとよといふもく兄弟愕然どうも驚る目を指して嘆息し南母御
 この月二日の黄昏戸田河原にてあつたをい何人かあひる訝しむを疑問に
 音音の外向うへりくあつたを付る声細くおされがとよけの事もあつた生るも
 死せりともあつたり甲夜に宿あつた人か和子云云と告るを洩すより粗あつた
 さづれ緋のいとく一目に折ありそれ首尾のあつたを扱む身同胞を去威の
 夏あり何の里の誰家か身を寓る和子八頃日か宿をせりおせしを知りてあつた
 親の安否を訊んとてあつたを索るあつたを詳に告よつたを問えし
 カ二郎を尺八共侶膝を進めくさい緋の機密を知り召れては何ぞ悪
 べ死去歳の四月の戦ひ小館倍盛をばゆり大家公道策をも敵あつた殺靡け

小違われが馴染薄る吾妹子小母を任ふこの山里小落苗をゆきをいふ
 志すも父の反小傳せり之を曩小密語ゆひとも機密の漏るこりて遠慮を
 信せし知り物をもつる不孝の罪いと重りり程小母父と密々小相譚を
 或他郷の浮浪人或近國の俠客をど彼此とかく交りて竊小意中小擇り
 どもこれぞとあつりもか。あつる大塚の郷の浪人犬塚といふ壯士は父と面
 識る是益世の豪傑之唯彼犬塚のまかづばその支人小大飼犬田犬川を呼
 るめの智勇ゆきも方らば優まむこの人々を躬方小招ぐ大つら成らんとさ
 父の識量せりこの圖を技くを彼豪傑小下總よりかふ小船を寄れ大
 早くも譚ひ寄るこのつらかへ母書状を届けぬれと一通を季のあひの
 ありの彼人々をこの処へ立寄して智郎公と交りて結せ為りしこのつら果
 して彼人々大厄ありあつる危窮を極むる志を示す不足らばと大人の先見を由あれ

某小亦その議ありて父子三人豫てあり戸田河の東の岸小船を浮れ陸伏し彼
 犬塚小敵を追れてまを俟し小果して違ひを設けりやれ大八八件の人々を船に
 乗し小前面の岸へ漕渡りし程小某小敵を柱を陣番下田といふあをさ水
 中へ撃捕り有斯れと敵の舟を勢を憑て退くを追ひ返り戦ひ程小大
 塚の城ありま加勢の兵五六十人簇々と推寄る連放る鳥銃小兄小高脛を打破れ
 第左の肘を撃れて進退遂小合期せしれ先小彼此へ負ゆる浅残の交所係
 れはもとを面も振りし水際の敵を殺崩してその宵闇は紛々同胞齊一水中
 跳り入り底を潜りし前面の岸へ泗死著流斯丹精を盡しる大塚小往方也
 見届げしん小本意か記り且郎公小鎌倉へ竊小赴れあつる豫る報ありれ
 今項小彼処あり倘上野へ赴れ荒井山邊の隠宅小ありま母事の序小
 母の安否を訊く吾妹子小慰めとあひ血を吸ひ瘡小布を巻れ同胞送小



英泉画



忠
義
膽
既
往
を
話
説
七

夕日

力二郎

ウ

尺八

俱小正首小ニグ何と云ふひ一姉の意見理りかたは旅りあふ療艱小物缺く
 りもあふ死小幸ひりこの隠宅へ来るをわが願ひぬ命運中をまめられ看病の妻
 役ある小村小醫師のわが里を隔一縣までもれ通ずる茶劑を乞んかひりまも
 逗留して氣長く保養をせりといひりまも目餘る涙の露ハ玉とて欺りて誠の
 言の葉音音へ傍らちあまき媳達通いれり只官功を貪りて早ま真の忠義小
 あはれ裏中も如此ぞいひけりあまの疾ハ浅くとも破傷風はあつとわが昔婆
 扁鵲中も及びくせん俗小命が物種ぞと諭せばカ二尺ハ妻のまをんえりて
 大地小等一死も母のあふ慈愛の厚けをまもりまも男らぬも力達今小本
 貞操節義を等雨火あひも九戦國小生れ武夫が些の金残はかづらひく
 窄く月日を送らんやされ俺們兄弟ハこの曉小立ち立く潜る小鎌倉へ赴んと
 夢かかく敵の虚実を窺ひ便宜を獲バ郎公へ報進せん為られは倘幸かて

その可發覺れ雙言の死するものわが是今生の訣れ又唯憑む母沛のりのま
 兄弟小ありも代りく奉養を盡してえりも母百年の後小兄弟同胞ハ良家小
 再び縁一を結びりて一期を送りてのひ置るのこれのまを辭齊一と死
 示せば鬼ハ單節ハ安んじ侶音ハあま泣く悍ハ事小あま親を身
 をも妻を母もあふ忠義われがとけけ白井のあまて云云のりありふあり
 鎌倉まの遠くとも仇人ハの用心して木を伐り草を芟拂ひ穿徹金嚴密
 ずを知りて彼処へ近つて可憐命を阿容々々と墮はがハ鞠飲功名欲あひも
 かけ後ハの操を更く異夫ハ再び縁一を結べとあまもあは棄詞ハ情ハ
 似て情ハ小兒ハ浅瀬を問せり世の常言もあまのものをと浅らるる女子ハ言ハ
 些ハ聽く智惠深死男子の心ありて是非の深念を去あは後悔絶てあまハ
 願ハ親の光を諫めよ阿姑まを呼びり口説ハ一對の情義ハ遍海両貞女

歎なむ對の紅淚悲位いひ合ふ言の葉の揃ふ誠ぞ哀れも恩愛節操甚重の
 情致不泣立り力二郎尺八も又たなく嘆息あつるの二個の妻の泣沈しを
 再び此もえんべに兄の弟小目を注いで母小對ひく稟はせり申す單節が切を
 諫言それをもあそ母大人の一言をり貫たゆん慈愛の身小入る名残の惜
 けれどもともかとも某ホの永くこの地小留りが一就え又情願ありそのか父の
 免神宮河原は漁獵して細火煙を立つても又異妻を娶りぬる況故主の大恩を
 報ん為小身を捨て彼犬塚ホの四犬士を斬くこの地へ引著ゆひその績莫大
 なるもその身の栄利を多て右田河は投とゆひた義烈任使西かく想像不
 腸を射るも小いと良くと痛むはるかゆひぬれば此度の功をり主君の勤
 當宥免あつて世間廣く某ホの父と唱へ子と呼れ母も平に夫婦ふれあはれ
 郎公小はえあけ執成る素懐を遂さるる一家の幸福この上中人の子とて父

かへこれ禽獸不異かびらも歎くゆもあまのり某ホが年来の心の憂ひをこの
 子の賢察仰ぎなると膝を進ゆく右ひらり母の氣色を候ふ程に秋の夜
 かり尚長く心幽小響く遠山寺の五更の鐘を吹さる音音の媳婦と子共此
 情願忠貞節義不感嘆ゆ涙頻りふとあり落る袖小隠しと貌を改めんと
 いふ妻子の恩愛適んといふ良人の勇敢母の適けとも苗れとも今さる是非此
 判断をり又同胞が愁訴の趣理りかゆいとるいひどもとが口親執継ていさ
 和子小稟さる死いと恥しはるあそ昔の不義淫奔の世四郎との罪重く
 吾儕か科の輕恕あわゆる徳と人小勝と乳房小愛く和子の乳母小中あつり
 打つる主君の裁判道理小違はせりとあつれと道理小違はれと又奈何と
 推て又奴婢密通の子共を畜産小比きといふ本文小扱を情郎小只何となく
 身の暇を賜り吾儕を苗あひり警の宿の畜猫が他と牡猫と尾はる産

こねこちつ死。ち。ど。ぬがみ。う。子。福。ハ。母。子。縁。く。その。父。ハ。死。が。如。奴。婢。密。通。して。産。み。子。共。ハ。畜。産。小。比。せ。り。

律。と。申。ん。の。本。又。小。地。を。あ。ひ。道。策。ま。ぬ。の。あ。り。あ。ら。を。汲。も。あ。く。今。ま。和。子。ハ。

云。云。と。稟。は。面。を。死。ま。さ。り。び。也。あ。れ。れ。も。凡。世。小。人。の。子。と。し。て。その。親。を。あ。ら。ひ。死。

の。を。況。此。度。の。功。を。め。く。勸。解。ま。ま。ん。と。願。六。孝。行。協。ぬ。ま。も。打。を。獲。が。又。是。也。也。

わ。ん。う。彼。昔。四。郎。の。借。平。と。の。今。舊。恩。不。答。ん。と。子。共。を。資。て。云。云。の。事。あり。り。と。の。あ。ひ。も。

か。け。を。況。入。水。の。う。を。の。愛。も。あ。り。あ。れ。れ。あ。の。人。の。む。ぢ。ん。あ。る。年。来。帰。参。の。勸。解。も。せ。び。

故。主。の。滅。亡。を。外。を。あ。く。仇。人。の。民。お。り。あ。ひ。小。人。あ。ら。び。と。あ。の。不。死。を。朽。せ。く。腹。平。と。軍。節。

甲。夜。不。彼。人。の。噂。を。し。や。既。往。を。晤。り。慰。や。る。朽。不。影。さ。び。の。小。喻。は。漏。れ。を。借。平。と。の。あ。ひ。さ。く。

宿。り。を。授。め。あ。ひ。を。罵。拒。と。き。り。今。ま。多。人。が。七。魂。の。幻。小。人。を。あ。ひ。あ。ん。と。報。不。驚。く。力。三。郎。

尺。八。と。目。を。指。と。あ。ひ。あ。り。あ。の。父。ハ。甲。夜。の。間。に。本。あ。ひ。と。り。あ。り。俱。不。死。の。嘆。息。の。外。あ。る。ま。り。

里見八犬傳第五輯卷之五終

